「日本で一番大切にしたい会社」

著　者：坂本光司
出版社：あさ出版
発　行：2008年4月



会社経営とは、五人に対する使命と責任を果たすための活動である。五人とは、社員とその家族、外注先と下請け企業の社員、顧客、地域社会、そして出資者。「顧客満足よりも社員とその家族の満足が先。社員満足度の高い社員は会社を愛し、その社員と接する顧客の満足をもたらす。また、外注先や下請け企業の犠牲の元の利益実現ではなく、ともに利益を共有することでやりにくい仕事や面倒な仕事も一生懸命に取り組んでくれる。そして結果として出資者の利益に繋がる。」また、「会社は継続することが何よりも重要であり、利益は会社が継続するための手段である。継続しなければそこで働く社員の家族を路頭に迷わせることになる。」これが本書で貫かれている会社経営の姿勢である。そして大企業が繰り返す規模拡大とリストラ。それに対峙してリストラせずに長年増収を続ける中小企業を紹介するのが、本書「日本で一番大切にしたい会社」である。経営がうまくいっていない会社の経営者のほとんどが「景気が悪い」「政策が悪い」「規模が小さい」「ロケーションが悪い」「業種が悪い」と外部に原因を押し付けているが、本書では、企業経営の問題の99.9%は会社の内側にあると述べられている。内側とは人材であり、景気は与えられるものではなく創るもの。お客様が喉から手が出るほど欲しい商品を創り、提案すればいいのだと。

本書では、それを実現している企業として５つの中小企業が紹介されている。その一つ目が従業員約50名のうち、およそ７割が知的障害をもった方々で占められているチョークメーカーの「日本理化学工業」。二つ目が「会社は社員の幸せのためにある」ことをモットーに４８年間増収増益を果たしてきた寒天メーカーの「伊那食品工業」。三つ目が日本一過疎が進んでいるといわれる島根県の中でも辺鄙な石見銀山の麓にある義肢装具メーカーの「中村ブレイス」。四つ目が北海道で生まれ、決して北海道から出ようとしない菓子メーカーの「柳月」。五つ目が大規模スーパーの撤退で寂れシャッター店が目立つ商店街の中で光り輝く「杉山フルーツ」。その他にもコラムとして９社が紹介されている。どの会社もマーケティング的に優れた企画力を持っているのはもちろんであるが、その経営姿勢に「感動」を覚える。読みながら涙が溢れ出すほどである。

京都府立京都すばる高等学校　企画科学科長　貴島　良介